

## 教育実習（幼稚園）の現状と課題

－21世紀型資質・能力を培う保育に向けて－

### Current status and issues of teaching practice at Kindergarten

－For early childhood education and care that cultivates

21st century qualities and abilities－

渡邊 望

Nozomu WATANABE

#### 要約：

2017年に幼稚園教育要領などが改訂され、21世紀型の資質・能力を培うことを目指して、「主体的・対話的で深い学び」を軸として保育を進めていくことが示された。次世代の保育を担う、養成校の学生が保育現場で学びを深める実習においても、変化が求められる。そこで、実際の実習内容はどのようなものなのか、実習生を受け入れる現場の先生方はどのようなことを考えて指導に当たっているのかを知る手立てとして、α県私立幼稚園・こども園協会が行ったアンケートをもとに調査を行った。その結果、多くの実習園において、実習内容や実習評価が担任保育者に一任されていること、その実習内容は、担当保育者が自身の実習生時代の経験をもとに指導を行っていることが多く、長年にわたり実習指導の方法が継続され、変化が見られないことが明らかになった。養成校側が求める実習内容を分かりやすく伝える工夫、新たな責任実習などの方法の検証が今後の課題であるといえる。

キーワード：教育実習（幼稚園）／実習方法／責任実習

Keywords：Teaching practice at Kindergarten／Training method／  
Responsibility training

## 1. 研究の背景と目的

現在の保育現場では大きな過渡期を迎えている。2017年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下「幼稚園教育要領など」とする）が改訂、告示され、一人ひとりの子どもの特性に合わせて保育が行われるよう明示された。また、21世紀型の資質・能力を培うことを目指して、幼児教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。保育の方法に関しても、「主体的・対話的で深い学び」をキーワードとして、①子どもが自分で興味あるテーマを探し、自分からやりたいと思える学び、②自分一人で解決しないで、いろいろな人と直接対話することで、刺激し合って新しいアイデアを出すこと、③自分の持っていた知識と新しい情報が頭の中で結びついて、腑に落ちるような学びで、自分の中に学びを定着すること、が求められている<sup>1)</sup>。幼稚園、保育所、認定こども園（以下「幼稚園など」とする）においては、従来の保育方法や、クラス別の活動を軸としたスケジュールなどの見直しが求められるところもあるだろう。また、それに伴い養成校の教職課程（保育士課程含む）も見直しも行われている。実習は、学生がこれまでの生活や学習で身に付けた知識や技術を、保育に向けて集約し、学び直したり、体験を通して理解を深めたりするとともに、それら学んだことを総合的に実践する力を試す機会であるとされている<sup>2)</sup>。これらのことを鑑みると、当然これからの保育を担う養成校に通う学生が、最初に保育現場で学ぶ実習においても、21世紀型の能力・資質を培う保育を学び、試行する時間であるべきである。しかし、実習方法については大きな変化が見られず、20年もしくは30年近く前のスタイルと大きく変わることなく続いているように感じられ、その研究も進んでいない。そこで、本研究においては、実際の実習内容はどのようなものなのか、実習生を受け入れる現場の先生方はどのようなことを考えて指導に当たっているのか、それらは本当に旧態依然として変化がないのかを明らかにするとともに、これからの実習の在り方として、実習生自身が主体的・対話的で深い学びができる実習とはどのようなものを提案することを目的とする。

## 2. 研究方法

α県私立幼稚園・こども園協会が2019年5月に実施した「実習に関するアンケート」（依頼を受け、筆者が質問紙作成および集計を行った）から、実習園の先生方の実習に対する考えを明らかにし、現状を把握するとともに、課題を明らかにしていく。設問は選択式とし、選択肢にないものは自由に記述できるものとした。質問

内容は役職、経験年数などの基礎項目、実習指導・実習内容に関する項目、実習生が行う内容、実習日誌、指導案、責任実習、事前打ち合わせ（オリエンテーション）、実習評価とし、それぞれに3～22項目の選択肢を設け、必要に応じて「その他」として自由記述欄を設けた。加盟園100園に配布し77園292名から回答を得られた。その内訳は、園長37人、副園長・主任87人、クラス担任158人、その他6人、未記入4人であった。副園長・主任とクラス担任を兼務している場合には、副園長・主任として集計した。アンケート結果については、2019年9月に行われた同協会会議で公表されたものであり、園名や個人が特定されない形で研究資料とすることの承諾を得ている。

### 3. 結果と考察

#### （1）実習内容・指導方法について

実習内容や指導方法について選択式で質問したところ、「担任が自分の実習経験などを参考に指導している。」と答えたものが全体で193人/289人66.1%であった（表1）。また、その中から園長や主任などの役職者を除いた担任だけに限定すると112人/158人70.9%に微増している（表2）。つまり多くの保育者は自身の実習経験に基づき指導をし、指導された者が保育者となった時には同じように指導していると考えられる。このことから、実習指導のスタイルが長年見直されてこなかったことが明らかだといえるのではないだろうか。また、この実習指導のサイクルが、実習内容が数十年間大きな変化もなく続けられてきている要因ではないかと考えられる

また、「どこかの養成校の実習生が来ても同じ実習が受けられるようにしている。」との回答は全体で218人/292人74.7%、「養成校の評価票を参考に実習内容を変更している。」との回答は28人/292人9.6%であった（表1）。養成校によってカリキュラムや実習の位置づけが違い、実習で経験してほしいと考えている内容が多岐にわたっていること、それは評価票を比較すれば明確であることは、すでに明らかにされている<sup>3)</sup>。上述のように、自身の実習経験をもとに指導を行っていることが要因の一つとも考えられるが、養成校側の工夫や努力も必要であると言えよう。実習園と養成校が協力して、実習生の学びを支えることを考えると、養成校側の課題の一つだといえるだろう。

実習生と担当保育者の関係については、「常に実習生と担当保育者が一緒に行動するようにしている。」と回答した担任保育者が33人/158人20.9%、「実習生だけで保育準備などの作業をする時間を設けている。」と回答した担任保育者が79人/158

人50.0%であった（表2）。つまり、半数かそれ以上の学生は、担任保育者が何をしているのか見ていない時間があるということである。園児降園後の保育者の働きは、日々の保育の営みを支える重要なものである。子どもの様子の伝え合い、同じ学年の担任同士の翌日以降の保育に関する打ち合わせ、園全体での職員会議、先輩・後輩の保育相談やアドバイスなど、名もなき業務も含めて、学生に見てもらいたい保育者の仕事内容が多く含まれている。子どもたちの笑顔を支えている保育者の仕事を学ぶことが実習であると考え、可能な限り担当保育者とともに行動し、身近で学ぶことが必要ではないだろうか。

表1 実習内容について

① 園独自で実習カリキュラムが定められている。	124	42.5%
② 担任保育者に内容は任せられている。	133	45.5%
③ 担任が自分の実習経験などを参考に指導している。	193	66.1%
④ 主任や園長が実習内容を決めている。	88	30.1%
⑤ 養成校の評価票を参考に実習内容を変更している。	28	9.6%
⑥ どこの養成校の実習生が来ても同じ実習が受けられるようにしている。	218	74.7%
⑦ 実習生だけで保育準備などの作業をする時間を設けている。	142	48.6%
⑧ 常に実習生と担当保育者が一緒に行動するようにしている。	66	22.6%
n=292		

表2 実習内容について（クラス担任のみ）

① 園独自で実習カリキュラムが定められている。	64	40.5%
② 担任保育者に内容は任せられている。	71	44.9%
③ 担任が自分の実習経験などを参考に指導している。	112	70.9%
④ 主任や園長が実習内容を決めている。	48	30.4%
⑤ 養成校の評価票を参考に実習内容を変更している。	16	10.1%
⑥ どこの養成校の実習生が来ても同じ実習が受けられるようにしている。	112	70.9%
⑦ 実習生だけで保育準備などの作業をする時間を設けている。	79	50.0%
⑧ 常に実習生と担当保育者が一緒に行動するようにしている。	33	20.9%
n=158 経験年数平均8.7年		

## （2）責任実習の内容と指導案について

実習生が保育者に代わり、子どもたちの前で保育を進める責任実習（以下「責任実習」とする）に関する質問については、実習Ⅰ、実習Ⅱ共通して、「手遊び」「絵

本」の実施が多く見られたが、指導案の提出を求めるところは少なかった。「朝の会」「主活動」などは実習Ⅰに比べ実習Ⅱでは1.5倍～2倍近くの数になっている。クラス別で全体で一斉に進められる活動（以下主活動とする）については実習Ⅱではほとんど実施されており、そのすべてで指導案の提出が求められていた。「その他」の自由記述欄に記されていた意見のほとんどは、全日（登園から降園まで）の責任実習であった。「自由遊びのコーナー」については、実習Ⅰ：10.6%、実習Ⅱ：18.8%であった（表3、表4、表5）。

表3 実習Ⅰでの責任実習の内容

① 手遊び	132	83.5%
② 絵本の読み聞かせ	140	88.6%
③ 朝の会	93	58.9%
④ 主活動	86	54.4%
⑤ 昼食時間	67	42.4%
⑥ 帰りの会	92	58.2%
⑦ 自由遊びのコーナー	17	10.8%
⑧ その他	22	13.9%

n=158 経験年数平均8.7年

表4 実習Ⅱでの責任実習の内容

① 手遊び	136	86.1%
② 絵本の読み聞かせ	141	89.2%
③ 朝の会	144	91.1%
④ 主活動	153	96.8%
⑤ 昼食時間	126	79.7%
⑥ 帰りの会	142	89.9%
⑦ 自由遊びのコーナー	30	19.0%
⑧ その他	50	31.6%

n=158 経験年数平均8.7年

表5 指導案の提出を求める活動

① 手遊び	12	7.6%
② 絵本の読み聞かせ	32	20.3%
③ 朝の会	138	87.3%
④ 主活動	152	96.2%
⑤ 昼食時間	105	66.5%
⑥ 帰りの会	137	86.7%
⑦ 自由遊びのコーナー	6	3.8%
⑧ その他	37	23.4%

n=158 経験年数平均8.7年

幼稚園教育要領などによれば、以前より保育の基本は環境を通して行うものであると記されている。また、はじめに述べたように、これからの保育は、主体的・対話的な深い学びを通して、資質・能力を培うことが求められている。これは、従来見られた主活動を中心とした、全員同じ活動をして育ちのめあての達成を目指す保育ではなく、子どもが自ら興味のある活動を見つけて遊び込む、「自由遊び」の充実が求められている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に関しても、この目標を達成するために保育者主導で指導するのではなく、遊びの中で、これからの時代を生きていくのに必要となる資質・能力の基礎が「育っているか」、「必要な援助は何か」を見るための項目であるとされている。実習園自体が保育形態の移行期であることも考えられるが、「担任が自分の実習経験などを参考に指導している。」現状を考えると、実習生時代に「自由遊びのコーナー」遊びの経験が少ない（表3、表4、表5）状態で保育者となり、実習生の指導を任された時に困難さを感じることは容易に想像がつく。担任保育者に向けた実習指導に関する指導体制の充実や、養成校から担任保育者に向けたていねいな実習内容の依頼なども検討する必要がある。



るのではないだろうか。

また、実習生が行う責任実習に関して、「責任実習を主活動で行う場合の活動内容はどのようにして決めているか」の質問に対しては、「可能な限り実習生が考えてきたものを行う。」と答えたクラス担任が136人/158人86.1%であったのに対し、「クラスで行う予定だった活動を行う。」が1人/158人0.6%、「実習が始まってから実習生とクラス担任が話し合いながら決める。」が72人/158人45.6%であった（表6）。その中で、重複して回答している保育者も多く、実習生が考えてきた活動内容案に対し、ていねいにアドバイスをし、修正を加えた活動を実施している様子が見えてきた。「実習が始まってから実習生とクラス担任が話し合いながら決める。」のみを選択しているのは21人/128人13%であった。

表6 責任実習を主活動で行う場合の活動内容はどのようにして決めているか(クラス担任のみ)

① 可能な限り実習生が考えてきたものを行う。	136	86.1%
② クラスで行う予定だった活動を行う。	1	0.6%
③ 実習が始まってから実習生とクラス担任が話し合いながら決める。	72	45.6%

n=158 経験年数平均8.7年

本来の保育のサイクルは、子どもの姿から始まり、興味・関心を寄せているものや、経験して欲しいことから、季節や事象などを勘案して「ねらい」を策定し、「5領域」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を参考に活動内容や環境構成を検討して準備を行い、実践する。実践した保育内容から子どもの姿を見取り、次の「ねらい」の検討を行う流れが基本である<sup>4)</sup>。しかし、「実習生が考えてきた」活動の場合、継続的な子どもの姿や、そこから見えてくる「ねらい」を勘案して活動を検討することは難しい。このことに関しては、従来の主活動をメインとした保育内容や責任実習においても矛盾を感じながら指導してきた点ではあるが、主体的・対話的で深い学びを主とした保育に転換されているこの機会に、今一度ていねいに検討する必要があるのではないだろうか。中学校や高等学校の教育実習では、担当者が予定していた単元を実習生が授業を行っている。保育においても、担任保育者がどのような思いをもってその活動を行おうとしているのか、つぶさに伺いながら、担当者が計画した保育内容を実習生が実習する方法も考えられないだろうか。もしくは、担任保育者と子どもの姿や遊びの内容を振り返り、相談しながら、ねらいや保育内容の検討をし、実践する方法も検討する必要があるだろう。

### （３）実習評価について

実習の評価票が実習の指導内容に反映されていないことは、先に記したとおりであるが、実習評価を誰が行っているかを担任保育者に質問したところ、一番多い回答が、「評価はおおむね担任保育者が行う」で101人/158人63.9%であった（表7）。多くの園で、実習内容だけでなく、実習評価に関しても担任保育者に一任されていることが明らかになった。「評価は担任保育者、園長が相談して行う。」「評価は担任保育者、園長、副園長・主任が相談して行う。」との重複回答も見られ、担任保育者が記入したものをもとに相談する、もしくは、相談したうえで担任保育者が記入する様子がうかがえた。

表7 実習評価について

① 評価はおおむね担任保育者が行う。	101	63.9%
② 評価は担任保育者、園長が相談して行う。	21	13.3%
③ 評価は担任保育者、園長、副園長・主任が相談して行う。	51	32.3%
④ 評価はおおむね園長が行う。	0	0.0%
⑤ 評価は園長、副園長、主任が相談して行う。	1	0.6%
⑥ 評価はおおむね副園長、主任が行う。	5	3.2%

n=158 経験年数平均8.7年

実習評価に関しては、多くの養成校で５段階評価が用いられ、「子どもとのかかわりは適切か」や「実習生としてふさわしい挨拶や身だしなみをしている」などあいまいな項目が多く、評価のばらつきが問題とされている。仮に、実習の始業時と就業時に、毎日、すべての保育室を回って先生方に挨拶をする実習生がいた場合、「実習生としてはあたりまえ、普通」と感じる評価者もいれば、「よい」「とてもよい」と評価する者もいると考えられる。５段階評価のようにより細分化された評価は、きめ細かい評価が可能であるという一方で、評価基準が明確でないとばらつきが大きくなるというデメリットとがあると指摘されている<sup>5)</sup>。加えて、「評価は担任保育者が行うことが多い」ことから、個人的見解が強く反映され、評価にバラつきが生じやすいとも考えられる。また、表7で示している担任保育者の経験年数の平均は、8.7年であったが、２年目から27年目まで経験年数の幅は広く分布されていた。検証が必要だが、経験年数による評価の差も見られることが考えられる。そこで、本学では、評価のばらつきが少ないとされている、ルーブリック評価票を用いている（資料1）。

## 資料1 教育実習Ⅰ評価票

	評価項目	評価	4	3	2	1
社会人基礎力	挨拶・身だしなみ		挨拶は、時と場所、場合に応じて行うことができ、服装、髪型など身だしなみが清潔である。	挨拶ができ、服装、髪型など身だしなみの基本が身に付いている。	挨拶は指示されれば行えるが、服装、髪型など身だしなみの基本にそぐわない箇所がある。	挨拶は指示されてもなかなか行えず、服装、髪型など身だしなみの基本が身に付いていない。
	言葉づかい・態度		教職員に対して適切な言葉遣いと態度で接し礼儀正しい。	教職員に対して適切な言葉遣いと態度で接しようとしている。	教職員に対する言葉遣いと態度にいくらか不適切な箇所がある。	教職員に対する言葉遣いは、不適切で、教職員に対して馴れ馴れしかったり、関わりを避けようとしたりしている。
	素直さ・協働性		教職員の意見やアドバイスを理解し、園の一員として積極的に協力して職務に取り組んでいる。	教職員の意見やアドバイスを受け止め、園の一員として協力して職務に取り組んでいる。	教職員の意見やアドバイスを受け止められない時があったり、園の一員として協力して職務に取り組むことに不十分なところがあったりする。	教職員の意見やアドバイスを受け止められず、自己本位で動き、質問したり報告や確認したりすることを怠っている。
	自己課題・積極性		自己の課題や保育者の役割を理解し、積極的に自ら考えたり質問をしたりしながら取り組んでいる。	自己の課題や保育者の役割を理解しようとし、自ら考えたり質問をしたりしながら取り組もうとしている。	自己の課題や保育者の役割をいくらか理解しようとするが、取り組みは消極的である。	自己の課題や保育者の役割を理解できず、その解決に向けての取り組みも進まないでいる。
専門的知識・技能	子どもとの関わり	受容的態度 子ども理解	子どもに受容的な態度で接し、子どもの声や姿を受け止め、興味関心を理解しようとしている。	子どもに受容的な態度で接し、子どもの声や姿を受け止めようとしている。	子どもに受容的な態度で接しようとし、子どもの声や姿をいくらか受け止めている。	子どもに受容的な態度で接しようとし、子どもの声や姿を受け止めていない。
		積極的な関わり	担当しているすべての子どもに対して愛情をもって接し、子どもとコミュニケーションを楽しみ、信頼関係を築こうとしている。	多くの子どもに対して愛情をもって接し、子どもとコミュニケーションを取っている。	多くの子どもと接しようとしているが、関わりやすい子どもとのコミュニケーションにかたよりがちである。	子どもとの関わりにかたよがりがあり、愛情が感じられなかったり、特定の子どもとのみ関わっている。
		言葉かけ	わかりやすい言葉かけや間の取り方が適切であり、笑顔を増やせず、表情や身振りが豊かである。	わかりやすい言葉かけを心がけており、笑顔があり表情や身振りが適切である。	わかりやすい言葉かけや話の内容、遊びの時の話し方がいくらか不適切であり、笑顔が少なく身振りがいまいぶん硬さが見られる。	わかりやすい言葉かけが不適切だったり、遊びの時の話し方が粗雑だったり、顔の表情や身振りに硬さが見られる。
	実習記録	観察・記録の視点	子どもの発達や保育者の子どもへの働きかけの意図に気づき、内容を整理して記述している。	子どもの姿や保育者の働きかけの意図を考えて、記録しようとしている。	実習録の内容で、具体性や気づきが十分でない箇所がいくつかある。	実習録の内容で、具体性や気づきが十分でない箇所が多く、内容が曖昧である。
		記録の記入	主語と述語の関係や段落が妥当であり、誤字や脱字がなく、文字が丁寧に書かれレイアウトが読みやすく書き言葉で記述されている。	主語と述語の関係や段落が妥当であり、誤字や脱字は少数であるが、文字が読みやすく書き言葉で記述されている。	主語と述語の関係が不適切な箇所や、誤字、脱字もいくつかあり、文字もいくらか読みにくく書き言葉も不十分な箇所がある。	主語と述語の関係や段落が妥当でなく、誤字や脱字、空白が多く、文字が読みにくく話し言葉で記述されている。
		教材研究	子どもの発達や興味関心、経験の実態を把握し、経験させたい内容に応じた教材研究を行っている。	子どもの発達や興味関心、経験などの実態の把握に努め、教材研究を行っている。	子どもの発達や興味関心、経験などの実態の把握は部分的で、教材研究の取り組みも消極的である。	子どもの発達や興味関心、経験などの実態の把握が不十分で、教材研究を行う姿勢が不足している。
		指導案の作成	指導案の環境構成や保育形態が適切で、展開される子どもの姿を具体的に予想した指導案を作成している。	基本的なフォーマットに基づいて、設定したねらいに即した指導案を作成している。	基本的なフォーマットに基づき作成しているが、いくらか不備な箇所が見られる。	基本的なフォーマットに基づいた指導案が作成できていない。
	責任実習	保育の展開	指導案に基づきながらも、一人ひとりの子どもの反応や個性を踏まえて柔軟に対応し指導を行っている。	指導案に基づきながらも、子どもの状況を把握しつつ指導を行っている。	指導案からいくらかはなれたり、子どもの状況からいくらかはずれて指導を行っている。	指導案に基づかず、子どもの状況からみずして指導を行っていることが多い。
		保育の振り返り	指導の評価・反省を素直に受け止め、自らの指導にフィードバックして改善している。	指導の後、自らが設定したねらい（評価基準）を参考にし、評価・反省を行い、指導にフィードバックしている。	指導の後、ねらいからいくらかはずれた評価・反省を行い、指導へのフィードバックも不十分なところがある。	指導の評価・反省の後、同じことを教師から指摘されることが、なかなか改善されない。
	専門性の理解	職務の理解	園の方針や保育者の職務を理解し、自発的・積極的に取り組んでいる。	園の方針や保育者の職務を理解し、与えられた職務に取り組んでいる。	園の方針や保育者の職務を理解する程度で理解し取り組んでいるが、消極的である。	園の方針や保育者の職務を理解しえず、指示されても取り組みない。
		倫理観	職責を自覚し、規範意識を持ち、職務に誠実に取り組んでいる。	職責を自覚し、規範意識を持ち、職務に取り組んでいる。	自覚や規範意識が弱く、提出物の期限が守られないなど、職務に取り組んでいるが消極的である。	自覚や規範意識がなく、遅刻したり休んだりしても連絡をせず、指示された職務に従えないでいる。

ルーブリック評価は、詳細に記す必要があり、質問項目が増え、評価者の負担が増えることも考えられるため、質問項目を最小限にとどめ、自由記述式の総合評価欄を別に設けた。また、本学では「教育実習Ⅰ（幼稚園）」においては、観察実習と参加実習を中心とし、責任実習とそれに伴う指導計画の作成は求めていることから、その部分は記したうえで網掛けと斜線を設けて、その意図が伝わるように工夫をした。

実習園や評価者の意見は、今後確認していく必要があると考えているが、学生にとっては、実習中の行動指標が具体的に示されていることから、肯定的な意見が聞



かれる。養成校の実習指導担当教員としても、実習における目標値を明確に伝えることができ、事前指導において有益であると感じている。また、事後指導においても、学生と教員が客観的に実習を振り返ることができ、課題と目標が明確にしやすいことも利点の1つである。

#### （４）実習日誌について

実習日誌に関しても質問を行った。現在の日誌の形式について質問したところ、副園長・主任の回答の98.9%が「一日の流れを時系列で記し、子どもの様子や保育者の配慮などを記す。」で、27.6%が「ある特定の場面を取り上げ、エピソード記録としてその部分を詳しく記す。」であった（表8）。担任保育者の回答も、それぞれ97.5%、25.3%であり差は見られなかった。一方、どのような書式がいいと思うかの質問に対しては、副園長・主任の41.4%がエピソード記録と回答している（表9）。ちなみに担任保育者は36.7%であった。

表8 現在の日誌の書式について（副園長・主任）

① 一日の流れを時系列で記し、子どもの様子や保育者の配慮などを記す。	86	98.9%
② ある特定の場面を取り上げ、エピソード記録としてその部分を詳しく記す。	24	27.6%
③ その他	2	2.3%

n=87 経験年数平均19年

表9 どのような書式がいいと思うか（副園長・主任）

① 一日の流れを時系列で記し、子どもの様子や保育者の配慮などを記す。	55	63.2%
② ある特定の場面を取り上げ、エピソード記録としてその部分を詳しく記す。	36	41.4%
③ その他	15	17.2%

n=87 経験年数平均19年

子どもたちが、どのように主体的に遊びにかかわり、友だちや保育者との対話も通じて、いかに学びを深めているのかを知る手掛かりとして、一つの場면을深く掘り下げて記録することは、その後の保育実践につながる有益な経験となるだろう。今回のアンケートでは、なぜエピソード記録の方がよいと考えているのかは語られていないため、保育者の真意を今後検証していく必要があるだろう。

#### 4. 総合考察と今後の課題

多くの実習園において、実習内容や実習評価が担任保育者に一任されていることが明らかになった。その実習内容は、担当保育者が自身の実習生時代の経験をもとに指導を行っていることが多く、長年にわたり実習指導の方法が継続され、変化が見られない要因の一つであるといえるだろう。実習生の多くが実習中に不安を感じ、その3割ほどは自己解決しながら実習に取り組んでいることが指摘されている<sup>6)</sup>。実習評価票を参考に指導内容を検討している実習園が少なく、担当保育者の経験によって指導が行われているケースが多いことから、実習園と養成校の指導内容等に齟齬があることも考えられる。現在、クラス担任として指導に当たられている多くの先生方が実習生として学んでいた保育と、これからの21世紀の資質と能力を培うための、主体的・対話的な深い学びを実践する保育はちがい、自身の実習経験での指導は今後一層困難さが生じると考えられる。これからの保育を担っていく学生が、新しい保育の在り方を、実習を通して学ぶためには、このサイクルから脱却していく必要がある。

その為には、養成校と実習園の連携が必要であり、その一つの方法として、実習に関する研修の充実が考えられる。自身の経験以外で実習に関して学ぶ機会を設けることにより、学生時代とは違った視点で実習を捉え、指導方法を検討することができる。ただし、これには、研修内容の偏りが懸念される。先にも記したように、養成校にはそれぞれ独自のカリキュラムがあり、実習で学んでほしいと考えている内容にも違いがみられる。研修を担当する講師が、それらすべてを網羅することは難しく、講師の所属校に偏る可能性が考えられる。もう一つは、実習園に養成校によって指導方法を検討してもらう方法だが、実習園の立場から考えると、年間に複数の養成校からの実習生を受け入れているところも多く、その一つ一つの実習評価票を精査し、実習プログラムを検討することが容易ではないことは想像に難くない。そもそも、養成校の評価票が指導内容を記しているとは気づかない可能性もあり、そこから養成校の思いをくんで欲しいというのは難しいことかもしれない。そこには養成校側の伝える責任と工夫が必要なのではないだろうか。実習生を引き受けていただいた園には、指導していただきたい内容を記した、実習依頼文を園長あてに送られているケースが多いと考えられるが、実習生を直接指導にあたるクラス担任の保育者向けにも、指導いただきたい内容をていねいに説明した依頼を同封することも検討する必要があるのではないだろうか。

では、これからの実習ではどのような変化が求められるのであろうか。その一つ

は、責任実習であり、それに伴う夕方の時間の使い方、そして実習記録のあり方の検討である。今までは、主活動をメインとし、実習生が考えた内容を実践してきたが、これからは子どもたちが主体的に遊ぶ、自由遊びの時間での、環境構成や援助について実践できることが望ましい。しかしそれは容易なことではない。なぜなら、子どもたちが遊びの中で学ぶためには、考えたり、試したり、工夫したりしながら「遊び込む」ことが必要であり、「遊び込む」ためには、継続した遊びの中で子どもの姿を見取り、環境を整えたり、必要に応じて声をかけたりすることが求められるからである<sup>8) 9)</sup>。それには、短期間の実習の中で、すべてを理解し実践することは、実習生だけでは困難である。

そのためには、夕方、幼稚園であれば子どもたちの降園後の時間も見直す必要があるだろう。従来の実習スタイルでは、子どもと接している保育者の姿からの学びを重視していたが、子どものいない時間の保育者の働きからの学びも大きい。多くの時間を担当保育者と一緒に過ごすことにより、子どもの遊びの姿のどこに着目し、どのようにとらえているのか。翌日の保育に向けて、計画をどのように進めているのかを、近くで学ぶことが保育の理解につながると言えよう。その中で責任実習の内容を検討していくのだが、担任保育者からのアドバイスを聞きながら、場合によっては、担任保育者の計画したものを、その意図もくみ取りながら実践する方法も可能ではないだろうか。

自由遊び時に責任実習を行うためには、タイムリーな計画と準備が必要になり、実習生の帰宅後の時間的負担が大きくなることが予想される。そこで、実習記録の方法についても検討する必要があるかもしれない。現状では、実習生の実習記録に費やす時間は平均で3.5時間、3.8ページである<sup>7)</sup>。今回のアンケートで実習日誌に関して質問したところ、主任園長の多く36人/87人41.4%が「ある特定の場面を取り上げ、エピソード記録としてその部分を詳しく記す。」ことがいいと考えていることが分かった。また同様に日誌の適当だと思うページ数についての質問には、平均でA4版2.43枚であった。しかし、負担軽減のために実習記録の書式を変更するのは本末転倒である。実習生自身が主体的に子どもの遊びに関心を持って見取り、関わり、子ども達や保育者との対話を通して保育の学びを深めていける記録としていきたい。その中で、子どもたちの「やったこと」よりも、学んでいることが記録として残せるエピソード記録や、可能であればドキュメンテーションを実習記録に用いることも検討していきたい。

今回のアンケートでは、7割の保育者は「自分の実習経験などを参考に指導して

いる」と回答しているが、主任や園長が実習内容を決めていたり、園独自の実習カリキュラムが定められていたりするケースも多く見られた。また、役職に分けて結果を検討したが、経験年数による違いも見られると考えられる。実習記録も含め、実習園の先生方がどのような思いで指導に当たっているのか、具体的な意見を調査することも必要であろう。今後の課題として、継続的に確認を行っていきたい。

一度に多くのことを変更することは難しいと思われるが、実習園・実習生の協力を得ながら、一つひとつ検証を進めていくことが、今後の大きな課題である。

#### 引用参考文献

- 1) 汐見稔幸 (2017)「さあ子どもたちの「未来」を話ませんか」小学館
- 2) 太田光洋編著 (2018)「幼稚園・保育所・施設実習完全ガイド〔第3版〕」ミネルヴァ書房
- 3) 渡邊 望 (2015)「教育実習（幼稚園）で期待される学習内容と評価について－養成校の評価票比較から－」、保育文化研究第1号、pp.107-116
- 4) 太田光洋編著 (2015)「新版・乳幼児期から学童期への発達と教育」保育出版会
- 5) 瀧川光治 (2012)「本学学生の保育実習の評価の現状と課題(1)－2008, 2009, 2010年度生の保育実習1（保育所）の実習先からの評価の分析－」関西国際大学 教育総合研究叢書 5 PP.51-68
- 6) 戸川 俊 (2016)「保育者養成校における学生指導・実習指導の在り方について－学生を対象としたアンケート調査より－」、保育文化研究第2号、pp.63-72
- 7) 渡邊 望・戸川 俊 (2016)「実習生から見る幼稚園実習の実際と課題」、保育文化研究第3号、pp.45-60
- 8) 岩立京子 河邊貴子 中野圭祐監修 東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎編集 (2019)「遊びの中で試行錯誤することと保育者」明石書店
- 9) 杉浦英樹編著 (2019)「遊び込む子供を支える幼稚園カリキュラム」学文社
- 10) 太田光洋編著 (2016)「子どもが育つ環境と保育の指導法」保育出版会
- 11) 文部科学省 (2017)「幼稚園教育要領」
- 12) 厚生労働省 (2017)「保育所保育指針」
- 13) 内閣府 (2017)「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」